

-----「日本植物形態学会」設立に向けて-----

今日、植物の形態に関する研究は、蛍光顕微鏡を初めとした光学顕微鏡の発達、急速凍結固定法等、新しい電子顕微鏡技術の開発、TVによる映像撮影と画像解析法の発達、細胞培養技術の高度化などによって大きく影響を受け、著しい変貌を遂げようとしております。これらの技術の発達は、従来の観察技術では得ることのできなかった高次形態に関する情報を、動的、かつ定量的に得ることを可能にしました。また遺伝子工学、細胞工学といった技術及び方法論の発達の結果、植物個体や器官発生の構造形成過程を遺伝子の導入によって調べることができまます。植物の分子生物学や生理学が著しく発展すれば、植物の「形態」に関する情報はこれまでに以上以上に必須なものとして要求されるようになりましよう。従いまして、これまでとかく静的と考えられて来た植物形態学も、新しい内容を付け加え飛躍的發展が期待されているのが、世界的状況と思われまます。

一方、わが国における植物の形態、構造そしてその機能に関連した分野の研究者は、全国の諸機関でさまざまな研究を行なっています。その対象は器官、組織はもとより、細胞、細胞小器官から分子にわたり、分類学、系統学、生理学、生態学、発生学、遺伝学などあらゆる分野に関連を持っています。技術的にも光学顕微鏡法、電子顕微鏡法、さらには生化学的方法を用い、形態形成、発生、分裂、運動、刺激受容等、植物特有の現象から生物に普遍的な現象に至るまで、基礎的な研究を推進しています。

しかしながら、これらの植物形態学に関連した研究者は、新しい技術や思考の流れを積極的に論議し、実質的な相互の交流を行なう適当な場を持っていません。総合学会的な性格を持つ日本植物学会がその唯一の場と思われまますが、その中だけではこれからの植物形態学の発展に対処し、これを推進するための実効ある交流を図ることは不十分な状況にあります。

私ども発起人一同は、このような状況にある植物形態学の研究者相互の交流を図り、実

質的な植物形態学推進のための核となるような場をつくって、その一層の発展を期し、併せて研究者間の親睦を深める必要性を痛感して参りました。従来、日本植物学会の関連集會として、植物形態学会、植物細胞生物研究会、微細構造談話会があり、それぞれ固有の活動をして参りましたが、昭和60年の植物形態学会の集會を足掛りとして、私ども発起人が集參、協議し、これらを総合的に一つにまとめ、「日本植物形態学会」を設立しようという結論となりました。

「日本植物形態学会」設立の趣旨を充分にお汲み取り頂き、新しい植物形態学の発展に向けて、学会へのご参加、ご協力を頂きたく、宜しくお願い申し上げます。

発起人一同

- | | | | | | | |
|------|-------|-------|-------|------|-------|------|
| 秋山 優 | 石川依久子 | 伊藤道夫 | 井上 勲 | 井上 寛 | 今市涼子 | 上木勝司 |
| 植田勝巳 | 植田邦彦 | 植田利喜造 | 内海俊策 | 江原友子 | 大隅正子 | 太田敬久 |
| 岡村はた | 長船哲斉 | 小野亮爾 | 笠原基知治 | 加藤雅啓 | 金子堯子 | 上條明雄 |
| 河野重行 | 北川尚史 | 黒岩常祥 | 小林幹夫 | 犀川政稔 | 堺 弘介 | 坂口修一 |
| 佐藤七郎 | 佐藤利幸 | 三戸信人 | 島袋敬一 | 菅井道三 | 杉原美徳 | 鈴木孝仁 |
| 鈴木三男 | 関 太郎 | 世羅敬哉 | 相馬研吾 | 相馬早苗 | 高相徳志郎 | 高尾昭夫 |
| 高尾静代 | 高橋正道 | 竹久 慎 | 武丸桓雄 | 田中一朗 | 田中健治 | 田中陸莊 |
| 角田修次 | 中沢信午 | 長島秀行 | 長田敏行 | 中田政司 | 中村宗一 | 新津恒良 |
| 新居直祐 | 西尾康三 | 西野栄正 | 根平邦人 | 根本泰行 | 野口哲子 | 著本春樹 |
| 原 稟 | 馬場三吾 | 日詰雅博 | 平野 正 | 広川秀夫 | 福田泰二 | 藤田哲夫 |
| 宝月岱造 | 星野卓二 | 堀 輝三 | 増田恭次郎 | 松島 久 | 三木 子 | 三田高志 |
| 宮川 勇 | 宮田町子 | 宮村新一 | 村上 悟 | 矢沢静江 | 山田義男 | 吉田 治 |
| 吉田吉男 | 和田アイ子 | | | | | |